

福井市 PR 映像「out of the blue」をめぐる省察*

高橋 紀子^{*1}, 川島 洋一^{*2}

Visual Expression and Production Process of the Fukui City PR Film "out of the blue"

Noriko TAKAHASHI^{*1} and Yoichi KAWASHIMA^{*2}

^{*1} Graduate School of Engineering, Department of Social Systems, Design Course

^{*2} Faculty of Environmental and Information Sciences, Department of Design

The Public Relations Division of Fukui City has established the "Real Localism" project in 2020 with the aim of fostering civic pride by making PR films for inner branding. The aim of this project is to produce films to promote the attractiveness of Fukui City. Scenarios were open to the public, and three prize-winning works were selected. Thereafter, students of three universities in Fukui City (University of Fukui, Jinai Woman's College, and Fukui University of Technology) were asked to make films of all of them. This paper describes the production process and the visual expression of the film, "out of the blue", directed by the first author.

Key Words : PR Film, Tourism Film, Real Localism Fukui, Regional Resources

1. はじめに

福井市総務部広報課は、インナーブランディングによるシビックプライド醸成を目的として「リアルローカリズム つながり広げる事業」を2020年度に創設した。福井市の魅力を発信するための映像制作を目的とした事業である。シナリオが一般公募され、入賞作品3点が選出された。次に、それら3点すべての映像化が福井市内の3つの大学（福井大学・仁愛女子短期大学・福井工業大学）の学生にそれぞれ依頼された⁽¹⁾。

本稿は、第一著者がこの事業に参加し映像を制作した過程を記録するとともに、本事業で求められたPR映像の要件に対して試みた映像表現をめぐって、省察を論述することを目的とする⁽²⁾。

2. 作品の背景と目的

福井市広報課が「リアルローカリズム」事業の構想を具体的にまとめたのは、2020年3月であった。シナリオが同年4月25日から6月25日まで一般公募され、全国から応募があった計31点より、市内の大学教員らによる審査を経て3点の入賞作品が決定された。次に、福井市内の3つの大学（福井大学・仁愛女子短期大学・福井工業大学）の学生に対し、それぞれ3本すべての映像制作が依頼された。各大学の学生や教員、主催者である福井市広報課、報道陣などの関係者が集められ、同年7月29日にオンラインによるキックオフイベントが開催された。本稿第一著者は、野村健一氏作の「青い季節の風景画」の映像制作を担当することとなった⁽³⁾。

* 原稿受付 2021年05月08日

^{*1} 大学院 工学研究科 社会システム学専攻 デザイン学コース

^{*2} 情報環境学部 デザイン学科

E-mail: noriko.takahashi1977@gmail.com

Table 1 野村健一氏による「青い季節の風景画」の概要

福井のローカル鉄道「えちぜん鉄道」を通学で利用する高校生の男女の日常生活を通し、様々な季節を過ごしたふたりの関係性が変化していく様を描く。別離を歩むふたりは気づきを得て、なにげない日常生活を愛おしく感じ、大切にしたいと思う。そのような「ありふれた日常の尊さ」という価値観を伝えたい。

Table 1 に概要を示した野村氏の原案の意図を尊重し、映像制作にあたっては観光地の風景に頼ることなく、「登場人物の心情や心象風景を丁寧に映し出すことによって、福井市に住むことの魅力を伝える PR 映像」の制作を試みることにした。

これまで本稿の著者たちは、「地域資源の記録と魅力発信のための映像制作手法」を研究テーマとし、そこに「物語」を導入する映画的手法を追求してきた⁽⁴⁾。しかし、今回の「リアルローカリズム事業」で求められたのは、テレビで放映することを前提とした 15 秒・30 秒・60 秒のいずれかの尺の TV CM 形式の映像であった。いうまでもなく、15 秒と 60 秒とでは明らかに表現手法が異なる。今回は、野村氏の原案が物語仕立てであったため、その特徴を活かすべく 60 秒の映像を制作することとした。そこで、まずは短編映画の手法により撮影・編集・仕上げを行い、その素材・表現要素を抽出し 60 秒の作品に再編集することとした。

3. 「out of the blue」の概要

ここでは野村氏の「青い季節の風景画」を原案として、第一著者が新たに書き下ろしたシナリオ「out of the blue」⁽⁵⁾の構成を中心に概要を示す。

Table 2 「out of the blue」シナリオの構成

未知と和也は、福井市にある同じ高校に通う同級生である。和也がよく街の風景をカメラで撮り SNS で発信していることを知った未知は、和也とともに福井の街を巡りながら「なにげない、どこにでもある風景」を一緒に記録することを通して親しい関係になっていった (Fig.1)。



こうしていくつかの季節が過ぎたが、未知には秘密があった。未知は近いうちに遠方へ引っ越しすることが決まっていた。和也にそのことを打ち明けると、ふたりはぎこちない関係になってしまう。

和也と一緒に下校する最後の日、えちぜん鉄道の福井駅はいつものように静かだった。和也が電車に乗り込んだ瞬間、突然に未知は、ずっと言えなかったひとこと「好き」を告げる。和也の驚いた表情を見送る未知。そのころ、世界は (COVID-19 を想起させる) 新種のウイルスの猛威によって街に出ることすらままならない状況へと変化していった。



未知が引っ越しをし、さらにウイルスの猛威によって未知と会えなくなった和也は、未知と撮り続けた写真の数々を眺めていた。和也は未知との思い出を街の風景に重ねながら、あらためてこの街の魅力に想いを馳せる。また未知と会える日まで、未知と歩いたこの街の景色を、世界中のひとに発信し続けようと強く心に想うのだった (Fig.2)。

上記のシナリオを創作するにあたり、「地域資源をどう効果的に描くか」が最大の焦点であった。この作品においては、野村氏の原案の柱である「えちぜん鉄道を背景としたありふれた日常の尊さ」を、どのように映像で表現するかということである。それは「ありふれた日常」であるからこそ普段は見過ごされているが、仮に当たり前の情景をそのまま映像にしたところで印象的な絵にはなりにくい。そこで本作では「物語」

を効果的に利用することにより、この壁を乗り越えることを考えた。ここでは「ありふれた日常の尊さ」を象徴する出来事として、現実世界に起こっているパンデミックという事件を身近だった人物の不在と重ね合わせ、「当たり前」の日常が失われた世界を描くことによりドラマティックなストーリー展開を試みた。これまで本稿の著者たちが地域資源の映像化手法の研究を進めるなかで、映像における「時間の多層構造」と「喪失と再生」の物語表現が、効果的な表現手法であることを確信したからである⁽⁶⁾。

現在、COVID-19の猛威によって、ありふれた日常の風景は大きく変わってしまった。マスクの常時着用、各所に設置された消毒液、不要不急の移動の自粛、当たり前だった対面でのコミュニケーションをできるだけ避け非対面でのコミュニケーションが推奨される。2020年以前の暮らしとは大きく異なる新たな生活様式が突然に生まれ定着しつつある。これらの変化（ノンフィクション）と、物語（フィクション）の登場人物たちが失いつつある日常（ノンフィクション）とを重ね合わせ、それらを「時間の多層構造」を使って「喪失と再生」のテーマとして描くことにより、鑑賞者の心のなかにある福井における暮らしの「原風景」の価値を呼び覚ます映像表現を狙った。

また、「未知」と「和也」との関係性の変化や距離感を季節の変化とともに描くことにより、鑑賞者に時間の経過を疑似体験してもらい、「懐かしい記憶」という共感を得られるよう演出した。



Fig. 1 「out of the blue」場面写真（福井市）



Fig. 2 「out of the blue」場面写真（福井市）

4. 「out of the blue」の制作プロセス

4.1 キャスティング

キャストिंगに関しては、第一著者による前作の短編映画「Missing」に続き、「人」という地域資源を活かすことを狙った。そこでプロの俳優ではないが、「和也」と「未知」というキャラクターにふさわしい、素朴な存在感のある福井県在住の福井工業大学大学院生2名をキャストिंगした。

4.2 撮影

撮影は2020年11月6日、13日、18日（予備日11月19日、20日）の計5日間とし、主にえちぜん鉄道福井駅、同田原町駅、足羽山などの福井市中心部で撮影を行った（Table 3）。

ロケ地を選定するにあたっては、メインロケーションの「えちぜん鉄道」以外は、福井の観光スポットとして知られているロケーションを避け、なにげない日常風景から選定することを試みた（Fig. 3）。鑑賞者として想定するターゲットが、福井県在住者であることが大きな理由である。鑑賞者自身がよく知る場所の隠れた魅力を描くことにより、地域資源の潜在的価値を訴求できないかと考えた。この意識をもとに、ストーリーとの親和性が高い風景を選定することにした。






撮影日	11/6	11/13	11/18	11/19	11/20
ロケ地	えちぜん鉄道 福井駅	同・田原町駅	足羽山付近	福井工業大学	福井市駅前付近
シーン	A 最後の帰り道 	B 手を繋ぐ二人 	C 紅葉の中の未知 	D 福井市 外観 	E 秋の和也と未知 

Fig. 3 「out of the blue」撮影スケジュール

演出として特に工夫した点は、演技経験のないキャストの自然な魅力を引き出すために、撮影スタッフを最小限に留めることであった。第一著者自身が撮影、照明、録音などのスタッフワークを兼務する撮影方法を選択した。撮影カメラは「pocket cinema camera 4k (Black magic 社)」を全編で使用した (Table 3)。



Fig.4 「out of the blue」ロケーションマップ (福井市) 図版出典: Mapion (<https://www.mapion.co.jp>)

Table 3 使用機材一覧

カメラ機材	pocket cinema camera4k (Black magic 社)
カメラレンズ	50mmT1.5AS UMC (SAMYANG 社) ・ LUMIX H-FS12060 (Panasonic 社)
録音機材	H4n Pro handy recorder (ZOOM 社) ・ CVM-V 30LITE (COMICA 社)
動画編集ソフト	DaVinci Resolve17 studio (Black magic 社)
音楽サイト	Artist (http://artist.io/)

照明は主に自然光で行った。Fig.2 のイメージカットのみ、白と緑の布の前に和也役のキャストを配置し、事前に撮影した福井市の写真をプロジェクターで投影して多層で陰影の効いた照明効果を演出した。

録音は、台詞を同時に録音することなく、環境音だけを録音した。これは演技経験のないキャストに本番で負荷をかけず、表情や振る舞いによる演技に集中できる条件を用意するためである。一方で、ナレーション録音には、2021 年 1 月 27 日、2 月 9 日の 2 日間かけ、台詞による演技表現にこだわることにした。また TV 放送用に最終的な MA は、2 月 24 日に行った。このナレーションは、「和也」と「未知」を演じたキャストではなく、演技経験のある福井市出身の男子高校生一名と第一著者自身が行った。

映像に映るキャストとナレーションを行うキャストを分けた演出上の狙いとして、今回の作品の主な用途が TV CM であったからである。日常生活のなかでテレビの視聴に集中しているとは限らない鑑賞者に対し、ことばや音の表現力で最初に注意を惹きつけることが TV CM においては重要であると考えたからである。このナレーションの表現については後述する。

今回の撮影にあたり、いくつかの制約があった。まず、えちぜん鉄道関連の撮影は、営業中のロケであったことから、乗客の迷惑にならないよう、かつ乗客が特定できる姿で映さない配慮をしながら撮影する必要がある。この制約により、意図した自然な画角通りに撮ることができない場面があった。さらにコロナ渦であるため、キャストに配慮して短時間で撮りきる必要があった。キャストと撮影者が密にならない配慮もしなければならず、撮影できるカット数にも影響した。今後の映像制作においても、これらの問題は発生し得ることから、さらなる制作プロセスの工夫や演出面でのアイデアが必要であることを記しておきたい。

4.3 編集

次に編集について述べる。まずは撮影した映像素材を、短編映画の作法によりシナリオを活かしつつ7分の尺にまとめる編集を行った。そこからさらにTV CMに適したエッセンスを抽出する方法により、1分の映像へと再編集した⁽⁷⁾。

編集では色彩表現にこだわり、特に「カラーグレーディング」に注力した。本作の全体的なイメージとして、主人公の和也と未知との関係性が「温かく懐かしい」印象に映る映像にすることを狙った。また、失われつつある風景を印象的に描くため、輪郭をぼかした柔らかで優しい印象の映像となるようブラーやフレアなどのエフェクトを使用した。音楽に関しては、「Artist」(Table 3)という著作権フリー音楽ダウンロードサイトから選曲した。このサイトでは、海外のアーティストの楽曲が多数提供されており、今回の作品ではシナリオのイメージから「温かく懐かしい」印象を与える楽曲を3曲選曲した。

5. 7分版「out of the blue」での映像表現

ここではシナリオに基づき編集した7分版の構成表をFig.5に示し、各シーンで「物語と地域資源をどう関係づけたのか」「どのように表現したのか」「なにを映したのか」という構成上の要点を述べ、試みた表現方法を明らかにする。各シーンの映像は便宜的にキャプチャーで紹介する。



Fig. 6 撮影地：えちぜん鉄道田原町駅

・福井市の街の風景の点描

：「えちぜん鉄道 田原町駅」を俯瞰で挿入 (Fig. 6)

・和也の姿と街をカットバック

⇨ 冒頭で福井の街並みを客観的な画角で映し出すことにより、街と和也の空虚で刹那的な姿を重ね合わせた。

・未知のシルエット

⇨ 未知は、顔をはっきり映さずシルエットにした。
未知の存在実体が、曖昧で儚い存在だと印象づけた。

・タイトル「out of the blue」

：点滅する文字のモーションエフェクトを使用した。

⇨ 繊細な点滅で「喪失と再生」をイメージさせた。



Fig. 7 撮影地：福井工業大学

・教室 (和也の回想)

：未知と一緒に街を撮影しはじめたきっかけを回想 (Fig. 7)
和也N「君は面白そうと言って、それから僕らは夢中でこの街を (カメラに) 閉じ込めていった」

⇨ 未知のワンショットは、輪郭を曖昧にする効果を適用し表情がハッキリ見えないように表現した。

まだ和也にとって未知の存在は曖昧である。

福井の街に対しても和也はこの時点で漠然としている。



Fig. 8 撮影地：越前新保駅

・えちぜん鉄道・田原町駅 (和也の回想)

：島式ホームでお互い写真を取り合う和也と未知 (Fig. 8)。

⇨ お互いを映し合う＝今という「時間」を閉じ込めていく。

失われつつある風景と時間を記憶する行為の表象化。

⇨ 今は同じホームにいるが、いずれ別々の方向へすれ違うというイメージを暗喩として表現した。

⇨ 初冬の季節感、コートなど衣装で表現した。



Fig. 9 撮影地：足羽山付近

・夏の風景（空・木々）の点描

：季節の変化（時間の経過）を鮮やかな色彩で表現（Fig. 9）。

⇒ 空の青、未知の白い腕、黄色とオレンジの花冠の色彩。

和也N「春は通り過ぎ夏が来て、半袖から伸びる君の白い腕がやけに眩しかった」

⇒ ありふれた福井の風景が色彩豊かにキラキラと輝き出す。未知の表情をクリアに描くよう意識した。



Fig. 10 撮影地：足羽山付近

・秋の風景（足羽山の紅葉）の点描

：和也と未知、ふたりだけで過ごす時間（Fig. 10）。

⇒ **和也から見た未知のいる風景が、キラキラと輝いている。今まで見てきた風景からの変化を心象風景として表現。**

和也N「あつという間に秋が来て、赤と黄色とオレンジに君の柔らかなスカートが踊る」

⇒ 和也自身の心も踊っている、幸せな時間を表現。

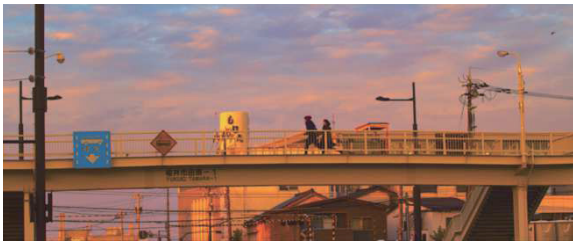


Fig. 11 撮影地：えちぜん鉄道田原町駅付近

・歩道橋を和也が未知の手を繋いで走る

：和也は初めて未知と手をつなぐ（Fig. 11）

⇒ 学生のスローペースな淡い恋愛を描くことで鑑賞者の学生時代の懐かしい記憶に働きかける表現を試みた。

⇒ 夕暮れのなかを走る和也と未知を映すことで、幸せな時間の終焉を予感させた。

⇒ 未知の表情は見せずシルエットで表現。



Fig. 12 撮影地：SUMU ガレリア元町商店街

・カフェで勉強する和也と未知

：未知が遠方へ引っ越すことを知る和也（Fig. 12）。

⇒ 和也の表情だけで表現した。狙いとして未知の表情は、鑑賞者に想像してもらふ手法を採った。

⇒ 揺れ動く和也の視線によって、二人に別れが近づいているというタイムリミットを表現。

和也N「君がもうすぐこの街からいなくなることを僕は知った」



Fig. 13 撮影地：えちぜん鉄道越前新保駅

・島式ホームですれ違う電車（イメージ）

：ウイルスの猛威によって未知とは今後、簡単に会えなくなることと和也は予感する。

⇒ すれ違う電車を和也と未知に見立てた（Fig. 13）。

⇒ 現実と、物語上の人物たちの状況を重ね合わせた。

和也N「地球が風邪をひいてしまったので、そう簡単には会えなくなる現実を僕は予感していた」



Fig. 14 撮影地：えちぜん鉄道福井駅

・えちぜん鉄道福井駅ホーム

：和也と未知、最後の帰り道で、未知が初めて和也に自分の想い「好き」と告げる（Fig. 14）。

⇒ **ここまで未知の顔を真正面からとらえていなかったが、初めてアップを採用した。また、台詞もオフにし鑑賞者に未知の声を想像させる効果を狙った。**

⇒ 電車の出発の合図＝二人のタイムリミットを表現した。



Fig. 15 撮影地：えちぜん鉄道福井



Fig. 16 撮影地：えちぜん鉄道福井駅



Fig. 17 撮影地：福井市ガレリア元町商店街



Fig. 18 撮影地：福井工業大学



Fig. 19 撮影地：足羽山付近



Fig. 20 撮影地：福井市中央公園

・電車内・未知の突然の告白に動揺する和也

和也N「君が好きだと呟いた、突然のことだった」

⇨ ここでタイトルの「out of the blue」（思いがけず、突然）の意味が表現されるよう設定した（Fig. 15）。

和也N「僕は雷に打たれたかのように頭のなかが真っ白になって、動きだす列車にただ揺られていた。これが僕と未知との最後だった」

・和也の乗った電車を見送る未知

：未知の後ろ姿を映し、無音で表現した（Fig. 16）。

⇨ 時間を止める効果、ふたりで過ごした時間を永遠に感じる効果を狙った。それと同時に失われつつある時間の現実を受け止める表現を重ねた。

⇨ 鑑賞者に未知の表情を想像させる効果を狙った。

・街を歩く和也と未知（イメージ）

：未知が引っ越してからウィルスの猛威によって街へ出ることすら容易ではなくなった。

⇨ 街に出てカメラで撮り続けることができない和也は未知と撮った写真を眺める。（Fig. 17）

⇨ 初めて未知が愛おしい存在で大切であったと気づく和也。未知が和也にとって「この街そのもの」と気づく。

・教室で密かに未知を見つめていた和也（Fig. 18）

⇨ 和也は未知に対して「初めての恋」だと自覚する。

⇨ 今まで自分の一方的な承認欲求で発信していた街を、「この街が好きだ」と世界のどこかにいる伝えたい相手を意識した想いで発信する目的へと変化する。

和也N「世界中のひとにこの街が好きだと言いつらしてやるんだ。いや、世界中のひとじゃなくていい、たったひとり君に届けばいい」

・和也に微笑む未知（イメージ）（Fig. 19）

和也N「また逢える日まで。僕も君が好きだよ」

⇨ 「あり触れたこの街」＝「特別な存在」＝「未知」

・未知が青空を背景に微笑む表情（Fig. 20）

：微笑んでいるがどこことなく寂しげな表情の未知。

⇨ 和也がずっと見つめてきた未知を象徴的に表現した。

⇨ 普遍的に存在する空（永遠）と未知という存在（刹那でありながらも永遠である）を重ね合わせた。

⇨ タイトルの「blue」と澄み切った空の青を重ねた。

⇨ 未知とのかけがえのない思い出も、いずれ過去になることを暗示するため満面の笑みではないカットを採用した。

Fig. 5 7分版「out of the blue」の構成表

7分版における映像表現の大きな特徴は、和也の視点によるモノローグのナレーションを設定したことである。これは演出上、「和也」の心情をストレートかつ正確に描きたかったためであり、未知の心情は映像のみで描き、鑑賞者に想像してもらう手法を採った。この演出を採用した意図は、「和也」という「ごく個人的な想い」を深く描くことで、鑑賞者のなかにある「ごく個人的な想い」とを重ねてもらうことを想定したためである。「だれもが一度は過去に経験したことのある感情」と共鳴し、物語の説得力に昇華できるのではないかと考えた。

6. 7分版と1分版との表現比較

ここでは、7分版の作品とそこから表現要素を抽出し再編集した1分版を比較して説明する（Table 4）。各表現要素をシド・フィールドが提唱した「三幕構成」⁽⁸⁾の方法により整理し、タイムコードとともに記述した。

Table 4 「out of the blue」7分版と1分版との表現（構成要素）比較表 ※ 囲み文字は1分版のために抽出した表現要素

	7分版の映像構成 ※	1分版の映像構成
一幕（発端）	<p>01 福井市の景観：撮影する和也の様子（現在）</p> <p>02 揺れるスカート・未知のシルエット（回想）</p> <p>和也 N「僕の小さな野望は君が現れたことで少しずつ変わっていった」</p> <p>03 タイトルテロップ「out of the blue」</p> <p>和也 N「君と僕との他愛もない記憶の物語である」</p> <p>（タイムコード：0：00～1：24）</p>	<p>01 福井市の景観：未知 N「福井ってパツとしないよね」</p> <p>07 足羽山：和也 N「映えそうだなと思ってもお地藏さんいるし」</p> <p>17 街歩く和也・未知：未知 N「遊ぶとこ少ないし」</p> <p>●電車カット：和也 N「人ごみ見たことないし」</p> <p>08 歩道橋：未知 N「なんにもないし」</p> <p>07 秋空カット：和也・未知 N「惜しいんだよね」</p> <p>（タイムコード：0：00～0：26）</p>
二幕（中盤）	<p>04 教室：和也、未知との会話風景（回想）</p> <p>05 えちぜん鉄道：撮影する和也と未知（回想）</p> <p>06 夏・公園：シャボン玉で遊ぶ未知（回想）</p> <p>07 秋・足羽山：紅葉の中の未知と和也（回想）</p> <p>08 冬・歩道橋：ふたり手を繋いで疾走（回想）</p> <p>09 駅・電車内：未知、佇む姿（回想）</p> <p>10 カフェ：和也と未知の食事風景（回想） *未知が引っ越しすることを初めて知る和也</p> <p>11 島式ホーム：すれ違う電車（イメージ） *ウイルスによる世界的な日常の変化を示唆</p> <p>（タイムコード：1：25～3：55）</p>	<p>09 電車内 ：未知 N「でもさ、引っ越しすると思うと寂しいもんだよ」</p> <p>11 島式ホーム ：未知 N「このなんてことない風景がやっぱり好きなんだよね」</p> <p>●未知カット</p> <p>04 教室の和也・未知 ：未知 N「私がいないと寂しくなるでしょ？」</p> <p>10 カフェの和也・未知 ：和也 N「別に」 未知 N「反抗期か！」</p> <p>（タイムコード：0：27～0：45）</p>

三幕 (結末)	12 福井駅ホーム ：未知、和也に告白（回想）	12 福井駅ホーム ：未知、和也に告白 ：未知 N「君との最後の帰り道、思い切ってことばにしてみた」
	13 電車内 ：和也、動揺（回想）	
	14 福井駅ホーム ：電車を見送る未知（回想）	18 田原町駅ホーム ：未知の笑顔
	15 教室 ：未知の姿（イメージ）	●電車内：和也の表情
	16 和也、撮影した写真を眺めている （現在）	05 えちぜん鉄道、和也と未知（別カット） ：和也 N「君と僕と」
	17 福井駅前 ：歩く和也と未知（イメージ・回想）	07 足羽山の和也・未知 ：和也 N「ありふれた日常と」
	*未知への想い・街への想い 「この街が好きだと発信し続ける決意」 ＝会えないからこそ想いを発信	18 電車内・足羽山の未知の笑顔 ：未知 N「君がいるこの街がすき」
	18 電車内・足羽山 ：未知の笑顔（イメージ）	和也・未知 N「いいね！福井」
	19 エンドロール	
	（タイムコード：3：56～7：37）	（タイムコード：0：45～1：00）

Table 4 で示したように、7 分版の構成において第二幕にあたる中盤部分から、多くの表現要素を取り入れ 1 分版に再構成した。また、12 の「福井駅で未知が和也に告白するシーン」（Fig. 21）は、7 分版、1 分版ともにクライマックスであり、ここから一気に終幕である第三幕へ移行することがわかる。

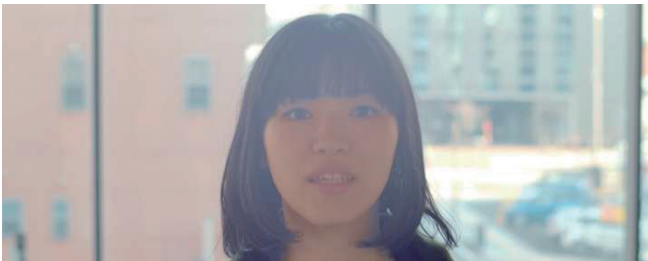


Fig. 21 「out of the blue」場面写真（告白する未知）



Fig. 22 「out of the blue」場面写真（告白後の未知）

また、これらストーリー上の演出とは別に、7 分版と 1 分版とでは語り手の視点を変えることとした。7 分版では和也の視点によるモノログとして設定し、和也の個人的な心情を中心に描くことで鑑賞者を物語世界へ没入させる効果を狙ったのに対し、1 分版では和也と未知が会話するダイアログとしてのナレーションを採用した。セリフとしては、和也と未知がそれぞれ福井市のウィークポイントをあげていくが、地元住民の日ごろの自虐的な心情に寄り添いながら、秘めたるプライドへと接続するためである。引っ越しが決まって街を出ていく未知にとっては、愛おしい街である前提で和也に話す。クライマックスでは、和也に今まで伝えられなかった「好き」ということばを未知が告げ、キャッチコピーとなる「君がいるこの街が好き」（Fig. 22）、続いてサウンドロゴの「いいね、福井」までつなげて締めくくることとした。

再編集した 1 分版では、COVID-19 を連想させる背景から一変し、全体的に爽やかで懐かしい印象の日常風景の描写とした。COVID-19 を連想させる背景を採用しなかった大きな理由は、1 分間という限られた時間で要点を絞って表現する必要があったからである。その前提で、「えちぜん鉄道を利用する未知と和也の日常」の中の小さな変化（未知が和也に好きと告げる行為）に焦点を絞り表現することとした。

また音楽は、7分版では登場人物の心情を描く場面の背景となるようインストロメンタルの楽曲を選んだのに対し、1分版ではTV CMであることを考慮して、明るい印象の耳に残りやすい女性ボーカルの洋楽を採用した。

7分版、1分版、どちらの作品も共通するイメージとして「温かでどこか懐かしい」「ちょっと切なくて甘酸っぱい」という印象を強く打ち出す表現を選択した。これは第一著者の「故郷」「原風景」というキーワードに対して自身が想う印象であり、鑑賞者の記憶に呼応するであろうと想定し表現することとした。

7. 「リアルローカリズム」成果発表イベント

2021年1月31日、JR福井駅前ハピリンホールにて福井市広報課が主催する「リアルローカリズム 動画CM発表会」が開催された（Fig. 23）。このイベントでは、シナリオ入賞者の授賞式、福井大学、仁愛女子短期大学、福井工業大学のそれぞれの学生が制作した作品の披露と制作意図のプレゼンテーション、そのなかからTV CMで放送される動画を一本選出するコンペが行われた（Fig. 24）。



Fig. 23 「リアルローカリズム事業」イベントの様子



Fig. 24 「リアルローカリズム事業」イベントの様子

2名の映像の専門家および福井市総務部長による審査が行われ、本稿第一著者が制作した1分版CMが最優秀作品賞に選出された。TV CMとしては、2021年3月7日から計9回にわたって放送された。

また、福井ケーブルテレビ（地デジ121ch）の福井市行政チャンネル「ふくチャンネル」内においても放送された。また、YouTube⁽⁹⁾や福井市が主催する各種イベント、JR福井駅前の屋根付き広場「ハピテラス」の大型ビジョンなどでは、すべての学生作品が配信されることとなった。

8. おわりに

インナーブランディングによるシビックプライド醸成を目的とした福井市広報課主催「リアルローカリズム つながり広げる事業」の一環として、本稿第一著者が制作したPR映像の制作をめぐる省察を述べてきた。野村健一氏の「青い季節の風景画」という原案の意図を尊重し、いわゆる観光地の風景に頼ることなく、「登場人物の心情や心象風景を丁寧に映し出すことによって、福井市に住むことの魅力を伝えるPR映像」の制作を試みることにした。

コロナ渦での映画撮影は、今回のような小規模な作品であっても困難に直面し、クオリティに対しても影響が避けられないことがわかった。一方で、自宅で過ごす機会が増え続ける昨今、映像コンテンツへの関心と需要はますます増えることが予想できる。また、東京一極集中が問題視されがちな時流において、地方の魅力を発信する映像表現は、今後さらに重要性が増してくると思われる。地域資源の魅力を発信する映像には、その数（量）だけでなく、新たな発想と手法の研究が必要となることを指摘したい。

本作品の反響について追記する。7分版の「out of the blue」は、第3回 日本国際観光映像祭にて「日本部門 旅ムービー部門」優秀作品賞を受賞、一般社団法人日本ポストプロダクション協会主催「第25回 JPPA AWARDS 2021」の学生映像技術部門 審査員奨励賞を受賞した。このことから、映像表現としては専門家による一定の評価を得たと考えられる。

現在は、本来この映像がターゲットとして想定していた一般鑑賞者による印象評価をアンケート調査中であり、PR映像としての効果を確認して別の機会に報告したい。

付記 作品クレジット

「out of the blue」(7分版, 1分版 2021年制作)⁽⁹⁾



Fig.25 「out of the blue」場面写真

キャスト：和也役：山本康介 未知役：中西あずさ
ナレーション：三浦太輝（1分版のみ） nao-369

主催：福井市広報課「リアルローカリズム つながり広げる事業」
原案：野村健一「青い季節の風景画」

脚本・監督・撮影・照明・録音・編集：高橋紀子

協力：福井工業大学 環境情報学部 デザイン学科 ほか

謝 辞

「リアルローカリズム つながり広げる事業」にてお世話になった福井市広報課の高岡聡様に謝意を表する。

註と参考文献

- (1) 公募時点では「シナリオ募集」となっていたが、実際に応募された作品のほとんどがあらすじや、断片的な映像のプロットであった。結果的に、審査はシナリオとしての完成度よりも、設定された内容と映像化の可能性を重視してなされた。映像制作は3つの大学にそれぞれ3本すべての制作が依頼された。
- (2) 本稿第二著者は、第一著者の指導者である。また福井市の「リアルローカリズム事業」においては構想段階から関与し、シナリオの審査にも協力した。
- (3) 野村健一氏は、えちぜん鉄道の元職員であり、勤務中に目撃した高校生男女のなにげない日常生活から着想を得て、「青い季節の風景画」を制作した。福井工業大学では入賞作3本の映像化にあたり、原作の性格や制作担当者の希望を考慮して、坂井日登美氏作「西藤島地区が誇る日野川桜づつみ」を同大学院博士後期課程2年の松原かおり氏が、荒井里緒菜氏作「なんにもない福井」を学部3年生の授業「映像デザイン」（担当講師：黒田和彦氏）の受講生4人が、「青い季節の風景画」を本稿第一著者である高橋が、それぞれ制作を担当することに決定した。

- (4) たとえば、高橋紀子，地域資源の映像化における「物語」を介在させた表現手法の研究，福井工業大学修士論文，2020．およびその主たる成果物として制作した短編映画「Missing」がある．
- (5) 「out of the blue」は，野村氏の原案をもとに，高橋が制作した映像作品としてのタイトル．キャスト：山本康介，中西あずさ，ナレーション：三浦太輝，nan-369，脚本・監督・撮影・編集：高橋紀子，2021 年制作．
- (6) 高橋紀子・川島洋一，地域資源の映像化における物語表現の試み 短編映画『Missing』の制作，日本デザイン学会 デザイン学研究作品集 (26)，pp. 40 - 45，2021. 3. にて論じた．
- (7) もとより 60 秒の CM を撮影するだけなら，こうした 2 段階に制作する必要はない．第一著者自身が，短編映画の作品制作を同時並行して行い，そこから表現を抽出する手法により 60 秒を構成することが，シナリオの物語を描ききり、表現として伝える上で有効であると考えたことが理由である．
- (8) 三幕構成は，国際的評価を受けるアメリカ合衆国の脚本家シド・フィールドが提唱する脚本の作法であり，脚本家の間に広く普及している．参考文献として，シド・フィールド，素晴らしい映画を書くためにあなたに必要なワークブック，フィルムアート社，2012．
- (9) 1 分版「out of the blue」https://youtu.be/kTqLXbAf_hE，福井市広報課ふくチャンネル，2021
7 分版「out of the blue」<https://youtu.be/Yb6iZMxaPFQ>，福井市広報課ふくチャンネル，2021

(2021 年 9 月 13 日受理)